

## 『右脳精神療法』

を変えて行くことはできる。本書にははじめを離れて、そのような学校のあり方への幾つものヒントも盛り込まれている。はじめをなくすというのは、全体的なそのような活動を背景に初めて可能になるものであり、それもまたエビデンスによって示されている。

私的な感想を一つ。書評子は自分の臨床実践からエビデンスに基づく医療（EBM）というものに対して、最近非常に懐疑的になつていて、本書を読んで、エビデンスを重視する姿勢にもう一度立ち返ろうと考えるようになった。今日の精神医療におけるEBMはおそらく目が粗すぎて重要なものが抜け落ちていだけなのだ。医学ではなく、教育のしかも実践の本から、科学とは何かということを学び直すとは不思議なことである。本書の著者に感謝したい。

杉山登志郎

(すぎやま・としろう／福井大学)

人間の生涯発達とその精神病理にアタッチメント形成過程が深く関与していることが明らかになるにつれ、乳幼児精神医学のみならず、児童期、思春期、さらには成人期の精神医学領域においてもアタッチメントへの関心が急速に高まりつつある。しかし、わが国では発達心理学においては長い間中心的テーマであり続けているにもかかわらず、精神療法や精神分析の学界においてはまだまだ真正面から取り上げられることは乏しい。臨床と研究との間に目立った統合の動きがないのが現状である。

そんな中で今春、神経精神分析家シヨアは大部の二冊を上梓した。

『右脳精神療法 Right Brain Psychotherapy』と『無意識のこころの発達 The Development of the Unconscious Mind』である。本稿では前者のみを取り上げる。

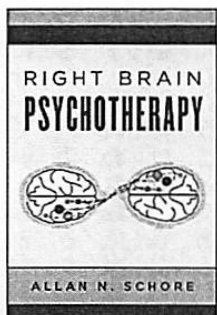
以前、評者は本欄で彼の著書を二冊取り上げたことがあるが、『情動調整障害と自己の障害』『情動調整と自己の回復』そだちの科学、二号、二〇〇四年)、今回はその集大成といえるものである。

「アメリカのポウルビー」とも称されている彼の研究の独創性は、アタッチメント理論とそれに基づく(情動)調整理論を柱にしながら、この数十年間の神経生物学の進展と精神分析学との統合にエネルギーを注いだところにある。神経精神分析学という新たな学問領域での仕事である。彼のこれまでの著書との最大の違いは、精神療法の手法にまで踏み込んで論じているところにある。

タイトルに「精神療法」を冠したところにそれが端的に示されている。これまでの脳研究を振り返ると、当初は認知機能に、ついで情動に、さらには対人機能に焦点が当てられ

てきたが、評者はかねがね従来の脳研究が単一の脳を対象に、静的に横断的にその機能を探求する限り、精神療法に益するものは少なく、かえって先入見を生む危険性が高いことを危惧していた。なぜならそこで得られた知見が安易に精神疾患の原因論に結び付けて論じられやすいからである。素質と環境との相互作用の結果の一部を示していることは確かであるとしても、それを原因と混同してはならないと思うからである。本書は評者のそうした危惧を払拭してくれるものである。

もともとアタッチメント研究に精通していたシヨアは、乳児と養育者の間で繰り広げられる情動を介したコミュニケーションの世界での情動調整の役割が人間の心の発達と病理に深く関与していることを重視するが、神経生物学の領域でこの数十年



W. W. Norton & Company  
2019年  
\$25.00-\$28.82 (Amazon)

間にパラダイムシフトが起こった。

それは単一の脳から、脳と脳の連関をリアルタイムで同時に測定することを可能にした技術革新である。そこでこの知見の蓄積を通して、シヨアは「心と脳の構造と機能は、情動関係を包含した体験によって形作られる」ことを繰り返して強調する。

開放系の組織である脳は外界（環境）との不断の交流を通して自己組織化を繰り返すが、とりわけ生後数年間の脳の成熟過程においては、特に右半球の成熟が急速に進行する。その過程で乳児の右脳と養育者の右脳とのあいだで情動の共振が生じる

ことよって、養育者と同様に乳児の右脳の神経回路が成熟を遂げる。

もしも子どもがアタッチメント形成過程でトラウマ（シヨアは「関係トラウマ」という）を体験すると、侵襲的な情動興奮から身を守るための対処として解離が発動する。乳児と養育者間の情動を介したコミュニケーションの断絶である。その結果、脳の成熟と心の発達が阻害される。それゆえ精神療法は、この情動を介したコミュニケーションの修復を目指す必要がある。治療関係に深

い退行をもたらすことよって、情動的コミュニケーションの再賦活化を試み、そこで治療者は患者の情動調整を担うことが重要だと主張する。

シヨアの主張は明快である。従来の患者個人内の言語や認知中心の精神療法から、治療者患者関係における非言語的、情動的コミュニケーションに焦点を当てたものへのパラダイムシフトである。そこにおいて治療者に強く求められるものは、非言語的、情動的コミュニケーション世界での感性である。

アタッチメントをめぐる世界を「甘え」の観点から捉え直しつつ精神療法を実践している評者にとつて本書は極めて刺激的である。なぜなら、シヨアの強調する関係世界は「甘え」の世界に他ならず、「甘え」によつてわれわれはより明示的にその世界を描出することが可能となるからである。

読者にとつてありがたいことに、九つの章のうち二つがインタビューでの彼の語りで構成されている。シヨアの主張がよりわかりやすく語られていくからである。

シヨアも述べているように、最近の世界の精神療法の潮流は「関係」と「情動」に焦点が当てられているが、本書はそうした流れを代表する著書の一つである。

本書を読むと、今後の精神医学、精神療法においてアタッチメント理論の果たす役割はいよいよ大きなも

◎ロバート・ウイタカー著、小野善郎監訳、門脇陽子・森田由美訳

## 『心の病の「流行」と精神科治療薬の真実』

タイトルや本の表紙から受ける印象とは異なり、本書は大変に真面目で学術的な本である。著者はすべて

のデータを、公表された論文から拾っている。ウイタカーの出発点は、精神科治療が進歩して来たなら、かつての感染症のように、精神科患者は減ってくるはずだ。ところがアメリカにおいて、すごい勢いで精神科疾患が増えている。これはなぜなのかという疑問である。彼は統合失調症の長期転帰を集めたWHOのデータの中で、最も良い転帰を示しているのが抗精神病薬の治療が行われて

のようになっていくことを予感させる。子どもを相手にするか否かにかかわらず、われわれ臨床家は赤ちゃんから学ばなければならない時代に突入したということである。

小林隆児  
(こばやし・りゅうじ/西南学院大学)

いない非先進国のものであることに気づく。

論文を丹念に読み込んで得られた彼の主張は単純である。抗うつ薬、抗精神病薬、抗不安薬はいずれも対症療法で根本治療薬ではない。薬を用い続けた時の長期転帰に関して、どの薬も良好な結果を示し得ていない。それどころか短期的にはそれぞれの症状を和らげるが、神経のシナプスに様々な影響を与え、その中には非可逆的なものも含まれ、長期転帰を悪化させ、実は多くの医原的な症状を作り上げてしまう。とこ